
異世界の花嫁

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の花嫁

【Nコード】

N6785X

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

お姫様よりもメイドに憧れていた私は、17になった今メイド喫茶でバイトしていた。店のゴミだしを行ったら、不意に現れたブラックホールもどきにメイド服のまま吸い込まれてしまう。ついた先はなんと異世界で、私は召喚された花嫁だった！

第一部

幼い頃、女の子なら誰しも一度は願うであろう『大きなお城に住む綺麗なお姫さま』。

でも私は違った。

普通の子たちよりも、少しズレていたのだ。

私は『大きなお城に住む綺麗なお姫さま』よりも、『大きなお城でお姫さまに仕えるメイド』をやってみたかった。

そんな非現実的なことを17になった今でも夢見ているわけではないけど、真似事はしてみたかった。

だから。

チリンチリン、とベルが鳴る。
それと同時に入ってくる二人の男性。

私はその人たちに笑顔に向け、深々と頭を下げる。

「お帰りなさいませ、ご主人様っ」

黒い服に、フリフリのエプロン。

いわゆるゴスロリメイド服。

私は絶やさず笑顔を振りまき、この店のお客様、つまりご主人様の命令に従う。

ご主人様達が全員帰ると、今日の『メイド』は終わり。

「お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様！ 美和ちゃん今日、悪いんだけどゴミ出しておいてくれる？」

「はい、わかりました」

店長はすまなそうに両手を合わせると、すぐさま何処かへ行ってしまった。

なにか用事があったんだ。

私はメイド服のまま、自分の荷物とゴミ袋を両手に抱えて裏口からゴミステーションへと足を運ぶ。

「はぁあー、疲れたなあ」

そんなことを言いながらも私はゴミを置き、手を離そうとした。
でも、手がゴミから離れない。

「へ？」

なんで？

瞬間接着剤とか誰かつけてた！？

私の頭の中はもうパニック状態！

あれよこれよと考えていると、手がズンツ、と沈んだ。

「は？……え」

見つけたのは黒いブラックホールのような空間。

そこにあつたはずの地面は消え、私はその中にズルズルと引き込まれてしまった。

「きゃあああああああつ！？」

ドンツ！

大きな音が聞こえた瞬間、お尻に激痛が走る。

「いつ……!？」

半分涙目になりなっていると、両手についていたゴミがストン、と外れた。

うつむいていたら床がとても綺麗なことに気づき、自分の姿がうつつていた。

黒髪黒目の、平凡そうな顔立ち。

顔の下にはフリフリの白いレースがついた、メイド服。肩には自分のバックがかっている。

「おい、俺にこんなゴミ持ちの女と結婚しろと言っのか？」

「はあ、しかしきてしまったからには、かなりの魔力の持ち主ですし…」

突如聞こえてきたそんな会話。

私はいまいちすつきりしない頭を上げ、見みると。

神々しいくらいに美形の金髪碧眼の男性が、美しい顔をこれ以上ないくらいに歪め、こちらを見据えていた。

………つて、え。

どこどこですか!？」

第二部

「だが、この娘に魔力があるとは思えん。魔力も感じない」

金髪の、神様ですか？ と聞きたくなるくらい美形な男性は、隣にいるご老人に言う。

それにご老人も答える。

「ワシも何も感じませぬ。ですが殿下、この儀式で呼ばれる者は皆強大な魔力を秘めた者」

「俺とてそれくらい知っている。だがこの俺にでさえ、この女から魔力を微量も感じぬのだぞ？」

聞こえてくるのは魔力とか、儀式とか、そういった単語ばかり。頭が混乱しすぎていて、何をどうすればいいのかさっぱりわからない。

私はとりあえず頭を整理させようと、深呼吸をする。

その後辺りを注意深く見渡してみた。

とりあえず目に付くのが、たくさんの人。

鎧のようなものを着た男の人たちや、巫女さんのような服をきた女の人们。

……ここはコスプレ喫茶か何かですか？

それにしても皆表情が硬い。

私もう一度、男の人のほうへと向き直ると、彼と私の視線が合う。

「お前、名前は？」

「へ？ あ……美和、です」

名前を聞かれていると時間差で認知し、急いで自分の名前を言う。すると彼は微笑んだ。『ニヤリ』と、効果音がつきそうな勢いで。その笑みはどこか裏がありそうな、なにかを企んでいそうな笑み。

背筋が本能的に凍る。

私の頭は「この人危険！ 逃げろ！」と叫んでいる。

「あ、あのっ」

「ん？」

私の必死の声に、彼は首をかしげた。

その仕草がとても似合っていて、より格好良く見えてしまい、一瞬見ほれてしまう。

けれど私はそんな乙女チックな感情を振り払うように頭を振ると、一番聞きたいことを聞いた。

「あの、ここは一体どこなのですか？ なぜ私はこんな所にいるのでしょうか……」

すると彼は「あ、忘れてた」とでも言うような表情をしてから、「老人のほうを見る。」

それに対してご老人は大きく咳払いをし、話し始めた。

……私の問いに答えてくれているようだ。

「ゴッホン！ まず、ここはレイアント大国の中央都市、シルフォニア。貴女は我等の次期主、クロウ・レイnant様の花嫁として召喚されたのです」

「へー花嫁。……って、花嫁!？」

「はい」

あっさり返答するご老人。

「とりあえず、なぜ花嫁をその、召喚？ するのですか？」

自分の国の人と結婚すればいいのに。

だが、そんな考えもすぐにご老人に否定される。

「この国の女性で、クロウ様の魔力に耐えられる女性がいなかったのです。いても既婚者が近すぎる血筋の者。最終手段として召喚という儀式が用いられ、貴女が選ばれたわけです」

「ちょ、ちょっと待ってください」

「なんでしょう？」

「魔力、とか召喚とか…。非現実すぎてついていけないのですが」

よく小説や漫画などでそういった作品は多々あるが、いざその状況

に立ってしまうとうまく思考をコントロールできない。

私が試行錯誤しているとクロウ…さんという男性が言う。

「そうだな。お前はいわば異世界から来た人物だ。詳しいことは後日話すとして、今日は休めば良い。まあ、まさか異界人がこういった服装を常時着用し、ゴミと一緒に来るとは思わなかったが」

そういつて私の服を指差し、くくくつと笑った。

それに流されるように私は視線を自分の服へうつす。

メイド喫茶のメイド服。

それも限りなくゴスロリに近いもの。

そのうえ私はゴミを両手に持っていたのだ。

……………最悪の登場。

「べ、別に私の世界の人が常時こういった服を着ているわけではありません！ むしろこういう服装の人は限りなく少ないかと…！」

とにかく、私は今頃きた恥ずかしさに赤面しながら弁解する。

それにわかったわかった、と面白おかしそうに笑う彼に、少しだけ親しみやすい人かな、なんて思ってしまった。

第二部（後書き）

お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございました。
今後も温かい目で見守ってくださいと幸いです。

第三部

その後私は「とりあえず、今日はゆつくり休め」と促されて、今日から自分の部屋になるらしい部屋へと本物のメイドさんみたいな女性に案内された。

部屋は机とイス、ベッドがあるだけの殺風景な部屋だった。

私はメイド服を脱いで、メイドさんらしい方にもらったネグリジェに着替える。

自分の服があるからいいと断ったのだが、妃がそんな服を着てはいけないとかなんとかで、半ば無理やりもたされた服と言っても過言ではないだろう。

私は着替えると、ダイブするようにベッドにもぐった。

ベッドは今までに経験したことがないくらいにふかふかで、目がさえてしまう。

見知らぬ天井。

見知らぬ世界。

感じたことのない高級そうなベッド。

見たことのない人たち。

正直、不安で仕方がなかった。
今日突然起こったことが頭の中をグルグルグルグルと駆け巡り、爆発しそうになる。

たくさんのことを考えていたら疲れたのか、私はそのまま眠りについてしまった。

昔の、風景。

桜が満開に咲き、他の家族やお友達が花見をして楽しんでいる。
でも、家の窓から私はその風景を眺めるだけ。

小さい頃、私の家族は誰も私を必要とも、気にしようともしてくれなかった。

『お母さん、なんで美和たちは外でお花見しないの？』

『……あら、あんたいたのね』

近くで母の袖を引っ張り、母に問うと、彼女はどうでもいいものを見るような瞳で私を見た。
でも、そこに私は映っていない。

父に聞いてみても。

「今は忙しいんだ」

としか返事をしてくれなかった。
その瞳にも、私は映っていない。

誰か。

誰か！

誰でもいいから私を見て。

誰でもいいから、私の存在を認めてよっ！！

「様。美和様！」

誰かにゆすられ、ハッと目を覚ます。

「……夢？」

「気がつきましたか？ うなされていたようですけど……」

目の前にいるのは、昨日に私を部屋に案内してくれて、ネグリジェを半ば無理やり押し付けてきた人だった。

こげ茶色のショートカットで、優しいような顔つきの若い女性。私の着ていたようなゴスロリではなく、本格的なメイド服。

彼女の名前はメフィー、だった気がする。

「申し訳ありません。外からお呼びしてもお返事がありませんでしたので、僭越ながら入らせていただきました」

「あ、いえ。全然」

なにが全然なのか。

自分でも疑問に思うような言葉で返答をする。

すると彼女は微笑んで、

「美和様。ノーフソン大臣がお呼びです。お着替えが済みましたら、きて頂きたい、と」

「ノーフソン大臣？」

「先日美和様にこの世界のことについて簡単に説明をされていた大

御所の方です。大まかな説明は先日してしまったので、あとは今後美和様がどのようになさるかについて口論するかと思われます」

「……はあ」

あまりピンと来ずに、あいまいな返事をする。
すると一瞬で彼女の顔つきが変わった。

「では！ お着替えいたしましょう！」

「……は？」

「ふふふ…腕がなりますわ！」

先ほどまでの優しそうな表情が嘘のようにたくらみに満ちた笑みへと表変する。

「え、ちょ、着替えくらい自分でできますよ！？」

「失礼します。……あら、想像以上に大きいんですね。ではこちらの方が…」

「って、ど、どこ触っているんですか！？」

その後着せ替え人形のようにいじられまくった私は、多大な悲鳴をあげるようになった。

第四部

「美和様をお連れしました」

「ああ、入れ」

扉の前でメフィーさんが、ハキハキと言う。

それに美声が返事をした。

私はその部屋の中へと入っていく。

見ると、中はやはり殺風景で、大きな丸机に、イスが数個。この城のような大きな建物は膨大な広さだが、家具の一つ一つがあまり豪華ではなかった。どちらかと言うと、長持ちするようなものばかり。

「とりあえず、お前はこれからどうするんだ？」

突然、問われる。

いや、どうするんだ？　って聞かれても、こっちが聞きたいのですが。…とは言えず、

「えっと、先日は混乱していたのであまりよくわからなかったのですが、もう一度、説明してもらってもいいですか？」

もう一度説明を求める。

すると大臣さんが説明を始めた。

最も、昨日と似たようなことだけでも。

「先日も言ったように、この国ではクロウ殿下の魔力に値する未婚の女性がありません。ですから、魔力の強い女性を召喚するためにこの召喚の儀式を行ないました。そして来られたのが貴女様です。

一方的に呼び寄せてしまったのはこちらの都合。故に、クロウ殿下の妃となるかどうかは、召喚されし者、つまり貴女様が決めることにございます。

しかし殿下は前王、つまり殿下のお父上とそのお妃様が亡くなられ、今は王候補の中の一人として名を挙げられている最中でございます。貴族や豪族など、各領主達の中でも口論を続けており、欲の多いものは陛下がお亡くなりになられたことによって税金を上げ、民を苦しめる始末。

もともとこの国はほぼ絶対王政と言っても過言ではない国。前陛下の弟君が王の座に着けば欲をあらわにし、民を苦しめることが目に見えております。

我々にいたっては、どうしてもクロウ殿下に王の座を継いでほしいのです」

「はあ」

曖昧に返事をする。
が、全く理解不能だ。

それにクロウ殿下は、短くため息をついた。

「ノーフソン、話がずれている」

「ぬ、申し訳ありませぬ。」

まあ、現状はこのようになっております。

もしクロウ殿下が王の座をお継ぎになれば、後継者が必要となります。

我々としては、どうにか美和様にはこちらの世界に残っていただき、殿下の妃となつて子を成して欲しいのです」

そういつて、深々と頭を下げる。

それに私は慌てる。

「あ、頭を上げてください！

妃になるとかなんとか、つて言うのはなんとなくわかりました。

あと、この世界がグチャグチャだということも」

それに、ノーフソン大臣は、ピク、と反応する。

あれ、言っちゃまずかったかな？

そう思いながらも、あえてそこは無視し、話を続ける。

「ですが、私は元の世界に帰らないと、色々支障がでるんです。バイト先にも何も言つてませんし、学校だってあります。それに、いきなり見ず知らずの人と結婚しろなんていわれても困ります！私は帰らなければいけないんです」

支障が出るのは学校とバイト先だけ。でも、私は帰らなければいけない。

それに、クロウ殿下が不思議そうに私を見る。

「帰らなくては、いけない？」

「はい」

「帰りたい、ではないのか？」

「……………いいえ、帰りたいです」

即答、できなかった。

彼は私の心を見透かすかのように下から上まで眺め、また笑う。

「そうか。だがしかし、お前の言うことにも一理ある。

そうだな…、一週間。一週間で良い、この世界に滞在し、俺という存在を知ってはくれぬだろうか？ もしそれで意を改めてくれれば喜んで受け入れるし、まだ帰るといふのなら止めはせん。どうだ？」

その言葉はどこか自身にあふれており、私が帰らないとわかっていくかのような口調だった。

それに私は、頷くことしかできなかった。

第五部

滞在三日目。

あと四日でこの世界からもとの世界へ帰る。

クロウ殿下は「俺という存在を知ってはくれぬだろうか？」なんて
いつていたけれど、実際やることも無くダラダラと過ごすだけで終
わりそうだ。

そんなことを考えながら天井を眺めていると、ノックの音とともに
優しい聞き覚えのある声が聞こえる。

「美和様、おきていらっしゃいますか？」

「はぁ、起きてます」

「失礼します」

「どうぞ」

すると見覚えのあるメイドさん、メフィーさんが笑顔で中へ入って
きた。

……ドレスのようなものを両手に抱えて。

「えっと、それは何でしょうか？」

嫌な予感が、する気がする。

しないとは言いきれない。

私が問うと、それにメフィーさんは笑顔で答える。

「さあ、お着替えしましょう!」

「え、ちょ、ま、待ってください!」

必死に叫ぶと、メフィーさんは残念そうに手を止めた。
そして、私の目を見て聞く。

「このドレス、お気に召されませんか?」

違う。そういうことじゃないんです、と言いたかったが、先にドレスへと目を移したのが失敗だった。

「か、可愛い……」

薄ピンク色の下地に、フワフワとしたレース。

胸元は開いているが、大きすぎず小さすぎずのピッタリな状態。
膝下辺りまである丈に、軽そうな生地。

うかつにもそう呟いてしまうと、彼女は嬉しそうに言った。

「そうでしょう!?

美和様はこういったものが好きではないかと、僭越ながら選ばせていただきました! では、お気に召されたことですし、お着替えを!」

「えっと、………はあ、わかりました」

メフィーさんの熱気　と言っても過言ではなさそうだ　に押され、私は仕方なく頷いた。

無論、ドレスを着てみたかったのも事実。

「これはこれは美和殿」

そついつて、呼びかけてきた中年の男性。
誰だろう？

すこしポツチャリした体形に、茶と金の混じったような、微妙な色の髪の毛。

髪型は微妙なオールバックだが、意図して作っているものではなさそうだ。

無駄に派手で、豪華な服装。

「はい？」

返事をして、振り返った。
するといやらしい笑みを浮かべ、脂ぎった顔で彼はいう。

「私が、現王のヴィーラだ。甥の花嫁になるそうだね？」

一瞬、なれなれしいな、とも思ったが、現王、つまりは前の王弟、大臣さんがカモフラージュに即位しているといっていた欲まみれの人だろう。

カモフラージュとはいえ、王様ならば態度がでかくても仕方の無いことだと割り切れる、と思う。

「初めまして、白崎美和しらかき みわです」

「おもしろい名前だね。甥とは仲良くしてくれたまえ」

そういつて、わっはっは、と下品に笑う。

おもしろい名前とはなんだ。お前だって相当おもしろい名前ですよ、と言いたくなる衝動を抑え、微笑む。おそらく引きつっているだろうが。

見ているものすごくイラつくが、我慢しなければならない相手だというのはなんとなくわかる。

「まあ、君が甥の妃になったところで、とくに支障も無いのだがな」

まるで自分が全て、とでも言いたそうな表情。

こっというタイプは嫌いな人種だ。

見ているだけでイライラする。

すると突然、肩に重みがかかった。

「叔父上、そろそろ彼女をかえしていただいてもよろしいでしょうか？」

心地よい、低い美声。

肩に手をまわされ、抱きかかえられている状態だと時間差で認識する。

「おや、クロウ。私が邪魔だといったいのか？」

「いいえ」

笑顔で即答。

しかしその笑顔の下は黒そうだ。

私は一刻も早くこの偽王を視界から外したくて、同じような笑顔でクロウ殿下に続けた。

「……すみません陛下。実は彼と会う約束をしていたもので」

本当は何も約束していない。

一瞬驚いたような表情を見せたが、クロウ殿下はそれに乗る。

「では、失礼しますね」

そういつて私達は王弟の元をはなれた。

肩を抱かれながら。

やがて王弟が見えなくなると、私は全力で肩に置かれた手の甲をつまんだ。

「いつまで触ってるんですかつ」

第六部

私はクロウ殿下の方を向き直る。

それにクロウ殿下は少し暗そうな表情をした。

「あの男に、なんていわれた？」

口調が上から目線。

この国で無理矢理私を連れてきたことに対して悪いと思う人はいないのだろうか？

それに口下手なのか、あの大臣さんにもしつかりとしたことを聞けなかった。

「ただ、挨拶をしていただけです」

「それだけではないだろう」

「……あとは、私が貴女の妃になったところでとくに支障もないとかなんとか」

そう告げると、彼は小さく舌打ちをした。

そして分かった、と一言言って帰ろうとする。

「ちょっと待ってください！」

私は反射的に彼の服の袖をつかみ、止めた。

「あの、私がこの国に来たとき、魔力を感じないのかなんとか言っていたよね？」

あと、こんなゴミ持ち女、とも言われた。

「それについて、少し聞きたいのですが」

「……………帰る気ならば、関係ないのではないのか？」

そういう彼の口角は、少し上がっている。

私がこの世界について問うことを待っていたかのように、王弟とは違う意味でいやらしい笑みを浮かべた。

「えっと……、帰りますけど、なんというか。

たとえ一週間であっても、滞在するのですから、何も知らずにバイバイは少し嫌なんです」

「へえ」

どんな言い訳だか。

彼は仕方がない、そういうことにしておいてやるか、というような声色で返事をする。

そして、

「ついて来い」

一言呟いて、また歩き出した。

つかんでいた袖が、手の中からすり抜ける。

無駄に長い廊下を歩き続けると少し他とは違った鳥のような、妖精

のような、植物のような、それらを足して三で割ったような、なんとも言えない絵柄のついた、大きな扉があった。

その扉に手をかけ

「俺だ、入るぞ」

そういうと、中に誰かいるから声をかけただろうに、返事を待たずに扉を開けた。

扉が開いた瞬間、私は絶句。

「なっ……………」

やはり豪華、と言うにはなにか欠けていたが、それをものともせず
にズラリと並ぶ本棚の数々。

その中に隙間なくビッシリと敷き詰められた様々な本。

ここまで多い本は、学校の図書室でも、市の図書館でも見たことがない。

「おいアノン」

そういつてクロウ殿下が呼びかける。

その方向を見てみると、イスに座り、静かに読書をしている男性がいた。

茶色い髪の毛に、物腰の柔らかそうな雰囲気、美形。

誰ですか、と視線だけで問う。それに、その男性から返事をもらえなかった彼は、はあ、とため息をついたうえで、

「アノン。俺の義弟だ、三番目の」
「へえー三番めの義弟さんですか、って……義弟!？」

なんだよ三番目の義弟って！

すかさず突っ込みどころを逃すところだった私は、少し声を荒げてしまった。

「ああ、三番目の義弟」

「な。じゃあ貴女のご兄弟は何人いるんですか」

「全部で13人。そのうちの5人は女で、俺には兄が一人いた」

「いた、って？」

「ああ、死んだよ」

あっさりそんなことを言つてのける彼。

そして、そんなことは気にも留めていない、といった様子で、アノンさんとやらの肩をゆすつた。

「アノン、戻って来い」

そういうと、それがスイッチだったかのようになり、彼は視線を上げた。

「っああ、兄上、どうなさったんですか？」

優しそうな声。

「どうなさったのですか、じゃない。お前の集中力は素晴らしいものだが、周りを見ることを忘れるな」

「はあ、すみません」

ぼけーとしたような声色で、彼は返答した。

オットリ系なのだろうか？

するとクロウ殿下は彼に向かって言った。

「コイツに、魔術について説明して欲しい」

ああ、なるほど。

つまり面倒くさいことは人任せなんですね、クロウ殿下。

第七部

「魔術、についてですか？」
「ああ」

アノンさんはなぜ？

という風な表情をしていたけど、私を見るなりなにか勝手に納得して

「わかりました」

一言。

それにクロウ殿下はじゃあ、と言って帰っていった。

訂正、逃げていった。

私は舌打ちしそうになる衝動を抑えながら、アノンさんに向き直る。
それに彼は優しく微笑み、

「では。」

この世界に魔術があるのは知っていますか？」

その言葉に、すこし驚く。

彼も私が異世界人だと言うことを知っていたのか。

……まあ、義弟なら当然かもしれないけど。

「まあ、なんとなく聞いたことはあります」

「そうですか。」

魔術は多種多様で、物を動かしたり、空気中の酸素を利用して炎を出したり、人や物を壊すこともできます」

な、なんと物騒な。

彼は私が理解していることを確認すると、続けた。

「しかし、魔術を発動するためには、生まれながらの魔力が必要になります。これは遺伝的なもので、己がどれだけ願おうが、どうすることもできません。」

魔力の強い者は、たとえば普通の人が掌サイズの炎しか出せないとする、自分の体の大きさ以上の炎を出すことが可能になる、といった具合ですね。まあ、これは一例でしかありませんが。

そのため、この王国の頂点に立つものは他に劣らぬ強い魔力が必須になります。血縁でしか王にはなれないので、その中で魔力の強い者同士が結婚し、子を成す。

そうしなければ魔力の強い子が生まれずに、国が崩れてしまうことになる。

そういったことを防ぐために、王位継承者は魔力の強い者同士で結婚する義務があるのです。

おそらく、そのために貴女は召喚されたのでしょう。
もうこの国の女性で兄上に見合うほどの魔力の持ち主はいませんから。

大臣は必死ですね。残り時間は少ないというのに、次の王補佐にしっかりとした現状を残していこうと頑張ってくれています」

えっと、途中からなぜ大臣の話になったんだろう？
顔にそれが出ていたのか、彼はクスッと笑って説明をはじめた。

「大臣はもう少ししたら退職するんです。
年も年ですし、彼の役目は前王の補佐でしたから、次の王補佐を後継者に受け渡すんです。
確か孫が受け継ぐはずです」

「へ、へえ……」

つまりは、クロウ殿下の子供のために私は呼ばれ、大臣は途中放棄で逃げると？

「それにしては……」

彼は私を上から下までなめまわすように見据えると、一言呟いた。

「魔力を感じることができませんね」

あー。

「そりゃあ、魔術云々なんてない世界にいましたから。あつたらこ

「つちが驚きです。アノンさんも」

「アノン、でいいですよ。」

あと、敬語も必要です。これから義姉弟になるんですし」

「はあ、っていうか、別にそうなる気はないんだけど……」

「え、そうなんですか？」

「まあ。あと数日したら帰るし」

「それ、不可能ですよ」

「それにこの世界にも　　って、はあ!？」

あれ、今幻聴が聞こえた気がする。

彼はなんていいましたか？

「えっと……、まあそれで私はもう少ししたらこの世界から帰らなく
ちゃ……」

「だから、それは不可能です」

「……………えーっと、どうせ帰るんだし」

「まあ、貴女がそう信じているのであればそれでもいいかもしれま
せんが」

現実逃避。

ああ、なんて素晴らしい言葉だろうか？

この言葉を今日ほど必要とした日はないと思う。

第八部

「ちょっと、詳しく聞きたいわね」

そういつて私はクロウに歩み寄った。

もう殿下も丁寧語も必要ない。

コイツは私を騙そうとしていたんだから。

この状況におちいったのは数分前。アノンが爆弾発言をして、私は「一週間で帰るかどうかを決めてくれ」といったクロウにどういうことか説明を求めに彼の部屋へと押しかけてきたのだ。

「なんのことだ？」

「白を切れると思っっているの？」

アノンが教えてくれたわ。私は元の世界に帰れないんですって？
どういうことなのよ！」

「はあ」

彼はそれを聞くと小さく息を吐いた。

「ちょっと、聞いているの!？」

「うるさい」

「へ、きゃああっ」

怒鳴ると、低い声で一言呟いた彼が、私を押し倒した。背後にはベッド。

……私が使っている物よりフカフカしていない。つて、なにをかんがえているんだ私!

「何するのよ？」

私は精一杯の力を振り絞ってキッと彼をにらんだ。……効果は薄そうだが。

彼は黙れ、と一言呟き、私の手片手で押さえつけると、もう片方で私の顎を押さえた。そして身動きのとれなくなった私へと顔を近づけてきて。

だんだん視界が狭まってくる。

私は反射的に目をぎゅっと瞑った。が、

「きゃああああああああああああああああっ」

そこで、私のものではない女性の悲鳴が聞こえた。
それにクロウは一度ちっ、と舌打ちをすると、すぐさま飛び起きて
悲鳴の聞こえた方向へ走り出した。
私も、彼についていった。

時間差でクロウのいる、悲鳴の聞こえた場所へと到着した。
そこで見ると、巨大な炎が渦を巻いて城を燃やしていた。

紅の獣のごとく激しい業火。
燃え盛る炎はどんどんと城を侵食していった。
あと何分たてば私の滞在部屋にたどりつくだろうか。

何分も必要ないかもしれない。

炎はこの大きな城をスッポリと包み込むような大きさで、威力を増していく。

その周囲では私が最初コスプレだと思っていた人達、兵士のような鎧をつけた男性達がタルなどで運んだ水をかけ、巫女さんのような服装の女性達は何か祈っている。

そしてそのほかの人たちは何かを唱えてはいたるところの水を操り
って、

「え、水が宙を浮いてる！？　なんで！？」

「この国の魔術だ。アノンから説明を受けただろう？」

「……こんなつかい方もあるんだ」

感嘆としていると、クロウは言った。

「でも、この程度じゃあこの火は消せないな」

そのとおりだった。

水をあらゆる面にかけているとはいえ、炎の勢いが弱まることはなかった。

それにクロウはニヤリとする。

「丁度いい」

「は？ 何言ってるの？ 燃えてるんだよ！？」

「ああ。丁度今は力の強い魔術師達が宰相と一緒に出ている。今この場でこの火を消せるのは俺か、王弟か、アノンのだれかだ」

彼は何が言いたいのだろうか。

「でも王弟はアホだからな。自分の力なんてつかわないだろう。アノンはこの騒動に気づいていないと思う、となると俺、になるが…」

そういつて彼は笑んだ。
私を見つめながら…。

「な、丁度いいだろ？」

「だからなにがっん……っ！？」

問おうとすると、突然口を塞がれた。
クロウの唇で……。

「ふぁ……ん…が！！」

なにすんのよ、と講義しようとするが、自分でもなにを言っている

のかわからない。

意識が少し遠のいてくると、ゆっくりと唇が離された。

「丁度いいから、お前の魔力を解放してやる」

第九部

見慣れない天井。

窓から入ってくるまばゆい光。
クラクラして、さえない頭。

ここはどこ？

今まで何をしてたんだっけ？

私はばーっとする頭をどうにか起動させ、横になっていた体を起こす。

と、最初に目に入ってきたのが、金髪碧眼の美しい男。

……あー、なんか思い出した。
思い出したせいか、イライラしてきた。

いきなり魔力を開放してやるだかんだかいつて、私の唇を奪ったのがこの男だ。

その、わ、私のファーストキスをクロウに奪われたんだ。
それからの記憶が無いのがなぜかはわからないけど。

それにアノンから聞いた話だと私は元の世界に帰れないらしい。
ふざけんな、と講義しに行ったらこの様だ。

私は目の前のイスに座って寝ているクロウを見つめる。

寝ていても整っている綺麗な顔。

ここだよだれの一つでも垂らしていれば可愛げがあるものを。

「あー、イライラする」

言葉に出してみても、彼へのムカつきは消せなそうだ。

「美和様、お目覚めになられたのですね？」

「……っ!？」

不意に背後から声が聞こえてきて、一瞬ビクとする。
見るとそこにいたのはメフィーさん。

その手には食事が持ってあった。

「三日も眠っていらっしやったのですよ。

どうぞ、お召し上がり下さい」

食事が差し出され、お腹の音がギュルルと鳴る。
今更ながらお腹が減っていることに気づいた。

私が食事を受取り、食べ始めると、メフィーさんが頭を下げた。

「先日は、調理師たちの不注意から起きた火事を止めていただき、
ありがとうございます」

「……はい？」

何のことだろうか。

確かに現場にはいったけれども、何もしてない気がする。

「美和様が魔術師のいないときに城を己の魔術によって救ってくだ

さり、美和様をクロウ殿下の妃にすることに対して反感を持っていた者たちが、ほとんど黙ってしまったのです。目には目を、ですね！さすがですわ！」

そういつて自分のことのように嬉々とするメフィーさん。

え、何の話ですか？

ちよつと待つて、おいてかないで！

あたふたしていると、うるさいぞ、といわんばかりの口調でクロウが話しに入ってきた。

「俺が開放したおかげで、お前の魔力が外に出たんだ。強力な魔力故に、この城にいる誰にも見えなかったものかな」

「……起きてたの？」

「今起きたんだ」

私の問いに当たり前のように答えるクロウ。
そりゃそうですよー。

「なんで、その、私の魔力を解放するのに、そ、その……キス、したの？」

最後の方の言葉の力が弱くなる。

それでも恋愛は初心者で、キスはおろか、プライベートで男性と手をつないだこともないのだ。

それも、好きな男性だったらもっとドキドキとかしたかもしれないのに、こんな奴に奪われては私の唇が不憫で仕方がない。

「別にキスである必要は皆無だった。

お前の体内に俺の魔力を流し込み、魔力を抑えていた分厚い扉を開ければいいのだからな」

「いや、だったらしくなくてもいいじゃない!」

「面倒くさいじゃないか」

「キスするほうが面倒くさいわよ!」

なんだろうこの男は。

ただの変態か?

そんなことを考えていると、メフィーさんが言う。

「ただ単に美和様と接吻したかっただけですよ」
「は?」

「それにクロウ殿下は面倒くさい面倒くさいといいながらも、三日間ほとんどこの部屋を離れずに美和様が目を覚まされるのを待ち望んでいましたし。

クロウ殿下にしては珍しく、他人に好意を持ったみたいですね。さすがは美和様です」

え。それは本当だろうか。

あんなに嫌味だった男が私が目を覚ますのを待ち望んで三日間もそばにいたなんて。

そういったことをされたためしがないからか、少し複雑な気分になった。

私が恐る恐るクロウの顔を見ると、彼はブイッと目を逸らし、無愛想に言った。

「メフィー。俺がいつそんなことを言えといった?」

「いえ、命令はされてませんわ。

クロウ殿下はクーデレ兼、ツンデレで、そのうえ感情表現が苦手の

ようですから、私が代わりに言っただけ上げようかと」

「余計なことはしないでいい」

「ふふ、申し訳ありません」

ニッコリ微笑みながら謝罪するメフィーさんに、頭を抱えるクロウ。
何だろう？

殿下とメイドにしてはヤケに親しい感じがする。

それにメフィーさんがクロウのことを知りすぎている気がする。

だからと言って恋人とかでもなさそうだし…。

あ。

「お母さんと思春期息子」

うん。これが一番しつくりくる。

けど、クロウは心外そうな顔でこちらを見た。

「何の話だ」

「だから、あんたとメフィーさんの関係。

そんな感じしない？ まあ、少し年が近い気もするけど」

「しない。

それにメフィーはもう50代だ。年も近くない」

「え、嘘！？」

メフィーさん50代なの！？

てつきり二十歳前後かと……」

「え、そう見えますか？

ふふふ、嬉しいですね！」

「若作りが上手いだけだ…」

ボソッとクロウが呟くが、メフィーさんは気にも留めない。
さすがだ。

人生経験がものを言うのだろうか？

なぜかこのとき、イライラしていたはずなのに、メフィーさんの一言で少しクロウに好感が持てた。

クロウの目の下につつすらとあるクマをみても緩んではまいそうになる口元には気をつけなければ。

今は少しだけ気分がいいので、多々ある疑問は後日にでも聞こう。
どうせ帰れないのだし。

……あ、そう思ったらまたイライラしてきた。

第十部

あれから一晩たち、私は今、殺風景な執務室のような場所にいた。

堅苦しそうなノーフソン大臣と、だるそうな表情のクロウ、にこやかな笑みを浮かべるメフィーさんを前に、無表情でクロウを見つめていた。

いや、とても（自分的に）冷たい瞳で、と言ったほうが正しいと思う。

じーーーーっと、穴があきそうなほどに見つめる。

そんな私と目を合わせようとせず、クロウは窓の外を眺めた。

「み…美和様……」

私の冷たい視線に、ノーフソン大臣が耐え切れなかったかのよう
に口を開いた。

「なんですか」

そういう私に大臣は

「申し訳ありません！……………どうか、クロウ殿下をお攻めにならないで下さい！」

ガンッ！！

と机に頭をぶつけそうな勢いで頭を下げ、謝罪しだした。

ちょ、そんな勢い良くて大丈夫なんですか。

特に腰とか……。

ぎっくり腰って結構痛いんですよ？

と、言いたくなつた衝動を押さえ、大臣を見つめた。

なぜこういつた事態になっているかと言うと、先日クロウの以外な一部始終をメフィーさんから聞くことのできた私は少しご機嫌だったのだ。

けれどもアノンの言葉を思い出して、帰れないということをはわからないけど、隠していたことについて、どうしてそんな嘘をついたか問いただしていた。

もちろんクロウに。

「謝罪はいりません。

謝ってもらったところでどうにもなりませんから。

私が知りたいのは、なぜそういつた嘘をつく必要があったのか、と言うことです」

言いながらクロウを見つめる。

けど、当の本人は上の空。

ちよつと、大切なことを話しているのになに考えてんのよ！
こつちの話を聞け！

……と視線で訴えてみるものの、効果は薄そうだ。

するとメフィーさんが笑顔でクロウの横に歩いていき、何かを耳元でコシヨコシヨと話し出した。

そして見る見るうちに蒼白な顔色になったクロウは、ゴホン！と咳払いし、話し始める。

「前にも一度、俺の妃になりえる女性を召喚したことがあったんだ」

一瞬、なにを話しているのだろうと思ったが、私の問いに答えてくれているみたいだと理解する。

その横で笑顔のメフィーさんが頷いている。

え、メフィーさん何をしたんですか！？

そんな疑問は届かず、とりあえずはクロウの話を聞くことにした。

「彼女は笑顔を振りまきながら、この国の妃になることで遺産など

を全て奪おうと企んでいた。

もちろんお前の雰囲気からしてそういったことを企んでいる様子はなかったが、帰れる、ということを前提にして、お前がどういう反応をするのかで、お前を見極めようとした。

まあ、それを聞いたお前の即「帰る」という言葉には驚いたがな。考えてみる。異世界とはいえ、国王の妃になるんだ。

ものすごくいい生活ができる。多少妃としてやることはあれど、豪華な食事に、豪華な部屋。遊びも何でもやりほうだい、我がまましほうだいだ」

そっついながら、少し悲しそうに顔をゆがめるクロウ。

でも、一つふに落ちない。

「確かに不自由はなさそうだけど……。

ものすごく豪華な生活ができるとは思えないわ」

私の言葉にクロウは、窓の外を見ながらなぜ？ と聞いてきた。

「だって、この城って、広いわりには家具が殺風景なんだもの。私の想像する王族ってもっと、こう……ギラギラしたものをジャラジャラとつけて生活しているようなものなの。王弟のように。

でも、この城は豪華とか、そういったものから疎遠なきがする。豪華さよりも、長く使えるようなものを選んでいく気がするの。

もし私が妃になってわがままばかり言っていたら、あなたたちは容赦なく注意しに来ると思うわ」

そういうと、大臣が目を見開いた。

メフィーさんも少し……笑顔がなくなった気がする。

えっと、王弟を馬鹿にしたことを怒っているのかな……。

そう思っていると、クロウがやっと、視線を私に合わせる。

その美しい顔立ちは、薄く笑みが広がっていた。

「どうだ？」

それなりに観察力のある女だろう。

頭はあまり良くなさそうだが」

「なんですって？」

聞き捨てならない。

初対面のときもそうだったけど、どこまで私をけなせば気がすむのだろうか。

ゴミもち女と呼び、試すためとはいえ嘘をつき、勝手にキスをして！
あー、もう、なんなの！？

しかし私の心を知ってか知らずか、追い討ちをかけるように言葉を続けた。

「魔力も高い。

純粋な魔力だったぞ。

それに外見も悪くない。なんとか許容範囲内だ」

今さりげなく馬鹿にできなかったかしら……？

第十一部

この世界にきてから、たくさんのがあつた。

私はベッドの上で、今までの数日間の出来事を冷静に思い返そうと思つて、目を閉じた。

まず、バイトのゴミ捨て場から、沈むようにこの世界にゴミごと召喚された。

あのときのゴミはどこにいったんだろう？ たぶん捨てられていると思う。

そしてクロウに「ゴミもち女」なんて嫌そうな顔で言われた。

今思い返すと第一印象最悪だったのよね。私も、クロウも。

その後に説明された私を召喚した理由。

簡単に要約すると魔力の強い子供を産めって言われたんだけど。でも、今の私に子供を産んで、育てられる自信も能力もない。というか、クロウの子なんてゴメンだ。

カモフラージュとして王の座に座る王弟、ヴィーラ。おそらく本人はこのまま王を取り次ぐ気になっていると思う。ノワーフソン大臣

はなんとか現役の時にクロウを王の座に着かせたいらしい。もう少しで退職だとか。ノーフソン大臣の次の王補佐は誰になるんだろう？

最初は一週間でここに残るか帰るか決めて欲しいと言われた。

でも、クロウの三番目の義弟、アノンによると、私は元の世界に帰れないらしい。

その理由を問い詰めようとクロウの部屋へ押しかけたのだけれども、途中で悲鳴が聞こえて、その方向へと走っていったんだ。

そしたら調理室から火が発火して、大きな火事になっていた。

兵達も主に剣などを使っている人たちばかりで、魔力の強い者はほとんどが外へ出ていた。

消せるとしたら魔力の強いクロウ、アノン、ヴィーラだったらしいのだけれども、アノンもヴィーラもその場にはいなかった。

残るクロウは、「丁度いい」なんていってニヤリと笑んだかと思ったら、いきなり唇を重ねてきた。思いつきり引っ叩いてやるうと思つたのに、力が入らなくて……。

「って、なにを思い出しているの私！？ あれは魔力を引き出すためって言ってたじゃない！」

嫌な概念を取り払うかのように私は頭をブンブンと振る。

そう。彼は私の体内に自分の魔力を流し込み、詳しいことは分からないけれども、私の魔力を制御していた扉のようなものを開いたのだ。

私の中にはものすごく大きな魔力と言うものが流れているらしい。

でも、実際そのときの記憶は全く残っていない。

目覚めたのはその三日後らしく、メイドのメフィーさんに『ありがとうございます、助かりました』なんていわれても、全然記憶が無いから実感もわからなかった。

でもその三日間、クロウは私に付きっ切りだったらしく、彼の不器用という意外な一面を見れて、すこしクロウという人物を見てみようとも思った。

その後ノーフソン大臣に頭を下げられ、今までの私についての嘘の数々は、私がどんな女かを試すものだったということを聞いた。地味に納得いかないけれども、それなりの理由があったのがわかったから、その件に関しては私も水に流そうと、……努力しようと思う。

この数日間で、たくさんのことがありすぎた。

でも、帰れないんだったら、この世界を楽しんでも……………。

「いや、駄目だ。私は帰らなくちゃいけない。なんとか、帰る方法があれば……………」

そう、帰らなくちゃいけない。

たとえもとの世界に、私を待っていてくれる人がいなくても。

私には帰らなくちゃいけない理由がある。

何があっても、どんなことをしても。

「……………でも、少しだけ。少しだけだったら、この、誰も昔の私を知る人のいない世界を、楽しんでも良いかな……………？ 姉さん」

私は静かに意識を手放した。

第十一部（後書き）

長らく更新せず、申し訳ありません。

そしてなぜか今までの出来事のようなものを作ってしまったので、章の位置を変更しようと思います。第十部は第一章に埋め込むことにしました。

ここからが第二章となります！
よろしく願いいたします！

第十二部

朝日が目にしみる。

窓越しに入ってくる眩い日差しに、私は目を細めた。
まだ起きたばかりで、眠気のとれない脳。

「ふぁあゝあ」

一度大きくあくびをすると、私は自室を出た。

どこを見ても広さはあるものの、豪華さという点においてはなにか欠けているこの巨大な城。

まだ帰れる見込みが無いのだし、この城の構図を覚えておいて損はない。

覚えておかないと、どの廊下も似たようなつくりになっていて、迷いそうだ。

メイドや侍女達の部屋に、調理室、私が召喚された広間。

多くの部屋を見てまわってみたけど、覚えられる自信が無い。

私は次に、見覚えのある部屋の前に立った。
大きな扉。

中にはおそらく、無数もの本がどっさりと並べられているはずだ。

そーっと、扉をあけてみる。

中を見ると案の定、数え切れないほどの本と、真剣に本を読むアノンがいた。

邪魔をしてはいけないかと、音を立てないように扉を閉めようとすると……。

「美和さん？」

「おっと……ごめんごめん。邪魔しちゃった？」

あれだけ集中していたのに、よく気づいたなあと思いながら私は苦笑する。

「いえ、美和さんの魔力を感じたので」

「え？」

「魔力開放されたんですね。兄上も無茶をなさる。貴女の魔力は独特だったので、すぐに気づきました」

「でも、さっき真剣に本を読んでなかった？ それに、アノンとあ

ったときはまだ魔力が開放される前だったと思うけど」

「ああ。……初めて感じる魔力だったので、適当に流していただけです。あなたがこの周辺を歩いていたときに魔力には気づいていました。」

扉が開けられたときに感じた雰囲気です。美和さんかと」

「へ、へえ……すごいんだね」

説明をされても全然わからないんですが。
とりあえずもう一度苦笑した。するとアノンは笑顔で

「どうぞ」

と、声をかけてくれる。

それに私は遠慮なく入れさせてもらった。

アノンはクロードの義弟だと聞いているけど、外見はともあれ、性格が異なっている。

クロードは言っていることやっている事がバラバラで、本音が分からない人。不器用といえば良いのか。

それに対してアノンは物静かで、熱中すると周りが見えなくなる。言葉は丁寧だし、人を気遣う優しさを隠さないから、少しわかりやすい……ように、わかりにくい。

あまり本音をさらけ出さないのは似ているかもしれない。

まあ、まだ会って間もないのだし、相手の性格を把握できるはずが無いのだけれど。

「そういえば、アノンはずっとここにいるの？」

「ええ、まあ。大抵はここで一日を過ごしてますね」

「へえ。本、好きなんだね」

「はい。本は素晴らしいですよ。多くの知識を得られ、その上作者等の多くの考え方を学べます！」

本を語るアノンの瞳は、驚くほどに輝いていた。
本当に本が好きなんだなあ……。

そんなことを思いながらも、私はアノンに尋ねる。

「今は何の本を読んでいるの？」

するとアノンは本の表紙を見せてくれた。

「……なにに？……」なぜバナナの皮は剥かないといけないのか

「?.....つて、何コレ!？」

予想外だ。

こっ……ものすごく理論で埋め尽くされていて、私にはわからないようなものがズッサリとあるかと思っただのに、ものすごくくだらなさそうな題名だった……。

啞然としている私を見て、クスクスと笑うアノン。

「意外ですか？」

「ええ……ものすごく意外」

「自分でも意外なんですよ。少し前までは魔法術の理論や、歴史書などを何度も読み返していたのですが、不意に見つけた、少しくだらない題名の本が意外におもしろくてですね。

同じ作者の本を探しては読むようになってしまったんです」

「ああ、なるほど。題名で判断してはいけないうてことね」

「いえ、題名どおりの内容でした」

「は？」

「この本は、果物などの皮をむいて食べることの意味を根本から説明し、最後には作者考えをまとめて書かれているのです。確かこの本の最後は『結論を言えば、果物の皮をむいたほうが食べやすい気がする』という言葉でしめられています」

もう苦笑するしかない。

そんな曖昧な本を読んでなんのためになるのか。
その上結論が「気がする」で終わるだなんて。

作者はだれなんだ……！！

私はそれを心残りにしながらも、資料室を出た。

さて、次はどこへ行こうか。

第十三部

私はアノンと別れた後、ふらふらと永遠的に歩いていた。

道に迷うといけないから、迷わないように地形を理解しようとしたのだけど…………。

「迷っちゃったじゃない!!」

何なのかしら。

この無駄に広い城は。

城だからでかい？

王が迷ったら元も子もないじゃない!!

どこを見渡しても同じような壁紙。

とても綺麗なせいで、「このシミの角を曲がれば私の部屋」というような覚え方もできない。

もとよりそんな覚え方はしようとも思っていなかったけど。

泣きたい。

無償に泣きたい！

そんなことを思っていたら、なにか叫ぶような声が聞こえてきた。
どうしたんだろう？

そう思つて、声主の方へ歩いていく。

男の、少し高めの声。

声のする扉の前に立つと、私はこっそりと扉を開けてみた。

「ちょ、やめ！ ゲイラ！ ぎゃあああああああああああ
っ！」

茶色の、フワフワした短髪の男性が叫びながら拘束されている。

それを見ながらゲイラと呼ばれたピンク色の髪の毛をポニーテールに縛った大人っぽい女性が、笑みを浮かべながら何か、液体のようなものを男性にかけた。

「ふふふ……。」

貴方はあたくしの研究に手を貸せるのです。
嬉しいでしょう?」

「嬉しくねえよ!!」

ってか、本当にやめっ……!!」

ゲイラが不適に笑いながら『実験』とやらを進める。

それに対抗するように男性は拘束された手を動かしたりしてもがくけど、その感情そうな紐のようなものは取れないらしい。

これは……。

そんなことを思いながらも、邪魔をしてはいけないと思い、扉を閉めようとする私。

ここはきっと二人の愛の巣なんだ。

邪魔をしてはいけない。

気づかれないように、そっと扉を閉めようとする。

閉めようとしたが、
ガタッ

お約束のように、大きな物音を立ててしまい、二人の視線が私に向

いた。

縛られている男と、それを見て笑みを浮かべる女。
その二人の視線が、私に向く。

「う、ごめんなさい!」

そう叫ぶようにして逃げようとする私に、ゲイラという女性が声をかける。

「お待ちなさい!」

「は、はい!? すみません、お邪魔はしないので、どうぞ続けてください!」

必死に叫ぶ私。

こんな変な人たちと一緒にいてはいけない。

一刻も早くこの部屋から逃げないと私が危ない!!

心の中はそれでいっぱいだった。

私の肩に置かれたゲイラの手。それを振り払うようにこの部屋から出ようとすると。

「落ち着きなさい美和！」

「ぶえ…っ」

突然名前を叫ばれ、顔をゲイラの両手で挟まれた。

何！？

なぜ名前を知っているのかとか、いろいろと疑問に思ったけど、とりあえず、なぜ顔を両手で挟まれているのか聞きたい。

ゲイラの手はそれなりに力強く、顔の位置が固定される。そして彼女の顔が私の顔の近くにあり、吐息がかかるほどだ。

近くで見ると、本当に綺麗な顔立ちをしている。

女性らしい、パッチリとした瞳に、形の良い唇、白い肌。

うつすらとされた化粧も、彼女の顔の魅力を引き立たせる道具ではないのだろう。

女の私が憧れる要素をたくさん持つ女性だ。

その後ろでは、拘束されている男性が必死にもがいていた。

第十三部（後書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。

遅くなりましたが、明けましておめでとございます。
今年も宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6785x/>

異世界の花嫁

2012年1月8日19時54分発行